

---

# A LEGEND

無南

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

A LEGEND

### 【Zコード】

Z7545

### 【作者名】

無南

### 【あらすじ】

俺は学校帰りにトラックにひかれた。が、目が覚めた。神様？によるとそこは天国らしい。そして、いつの間にか、全世界の命運は俺にかかるらしい。話がイマイチ分からないま異世界、ではなく、人類が一度滅びた未来に飛ばされた俺。未来のハズなのに、なぜ石の城とかあるのだろう。あつ、一度滅びたからか。と納得し、飛ばされた目的を達成すべく、地味に奮闘したりする冒険物、ここに始まり。

「暇だ」

ベッドや机や本棚やテレビやゲームしかない部屋で、短い黒髪の少年はベッドに仰向けに寝ころびながら呟いた。

漫画やライトノベルは全部見たし、ゲームもクリア済み。

宿題なんてやる気が起きるわけがなく、予習や復習もついてのほか。時間が過ぎていくのをダラダラと待っているだけ。

そんなことにでもいるような少年、九条九矢は、じく普通の生活を送っている。名前が珍しいことを気にしている17歳の高校生。

これは、そんな少年の物語。

普通じゃなくなつた少年の、数奇な物語。

## プロローグ - 日常 -

暇である。

時刻は午後7時。遊びに行くには遅いし、寝るには早い。

学校から帰ってきたままの服装なので、学ランのまま。

親は帰つてきていない。

とりあえず、腹が減つてきたから暇つぶしがてらコンビニに行こう。

服は……このままでいいや。

そうと決めたら即行動、と俺は携帯と財布を掴んで玄関に向かい、スニーカーを履き外に出た。

外に出た瞬間、ムワーッと擬音がつきましたから、生ぬるい空気が体を直撃したことにより、コンビニに行くことを一瞬ためらったのが10分前。今はコンビニにいる。

コンビニの中は温度も程よく、バイトの店員の挨拶もよし、と無意味な評価を下して漫画を立ち読みする。

昨日、いつも読んでる漫画雑誌が出たんだった。

立ち読みにも飽きた頃、腹が鳴つたことで本来の目的を思い出した。ありがとう、俺の腹。

適当にサンディッシュとレモンティー、激辛スナック菓子を買って外に出ると、再びムワーッと生ぬるい風。

若干イライラしつつ帰路に着くとポケットの中の携帯が振動しました。

そのことにまたイライラしつつ携帯を取り出し、メールの差出人を見ると、「楠」と表示されている。クラス替えで、名前の関係で席が前後になり、気があつて仲良くなつた悪友というやつだ。

内容は何かと思い、歩きながら見てみると

『暇。』

と表示されている。

意味分かんねえ。だから?

返信するかしないか迷つていると、再びメールが届いて携帯が振動した。また楠だ。

内容は、

『今から遊びに行かねー?』

携帯のディスプレイの右上に表示されている時刻を見る。

いくら高校生とは言え、遊びに行く時間ではないと思つ。辺りも暗いし。バカかこいつは。

バカかお前は。と返信し、ポケットに携帯を突っ込む。

いつの間にやら、家とコンビニの間にある本屋の前に差し掛かっていた。

本屋は明るい大通り沿いにあり、それなりに大きく、それなりに密足も多い。

財布には余裕があるし、当分の暇つぶしにもなるからラノベでも買つか。

目的地を自宅から本屋に変更して、本屋の自動ドアをくぐる。その際に、ドアの近くからピロピロリロと機械の音がしたことに少しビックリしながら足を踏み入れる。

コンビニと同様、程よい温度と湿度に設定されており、外に出たくないなあとか思いながらライトノベルコーナーへと直行する。

すらりと並んだ、身長178センチの自分よりも大きい本棚にビックシリと詰められたラノベの中からファンタジー系のものを選んでいると、再びポケットから振動。

携帯を取り出しメールを見ると、やはり楠。

『いやね？ 僕としてはもっと刺激が欲しいのよ。非日常的な。だからさ、どうか行くぜ』

俺といても非日常なんか味わえるわけないだりつ。それに遊ぶ時  
間じゃないし。

まあ、少しばかり日常的なことに出逢つてみたいと思つ。悪の組織  
と闘つたり、変な能力を得たり、異世界に行つたり……。

しかしそんなことは有り得ない。あつてほしいとは思つけど、有  
り得ないということには何の不満もない。今ままでいい。

時間を考えろバカ、と返信し、携帯をポケットにしまう。

そして、目の前にある、全5巻の異世界召還系のラノベを選んで、  
5巻とも持つてレジに向かい、会計を済ませた。

本の入った本屋の袋を、さつきのコンビニ袋の中に入れ、外に出  
ようと一歩踏み出したところでもまたメール。どうせ楠だ。  
呆れながら携帯を取り出してメールを見る

『ならか、何か面白い話してくれよ。じゃないと俺が死んでしまつ

ー』

死んどけバカ、と返信するためにボタンをプッシュしたと同時に、  
自動ドアをぐぐる。再び、ピロピロリロと音が鳴る。

外に出ると、田にチカツと小さく光るもののが映つたから思わず田  
を開じた。いろいろのを反射というんだつか、と中学で習つたこ  
とを思い出す。おそらく光は車か街頭のものだらうと推測してみる。

網膜に焼き付いた光が瞼の裏で消えたのを確認した後、ゆっくり  
と田を開けると……

眼前に、真っ白な世界が広がっていた。

。

?

! ?

「え？」

自分の目を疑う。何を見間違えたか。

車ではない。道路でもない。街頭でもない。

視界は「白」しかない。

携帯を持ちながら、手の甲で目をゴシゴシと擦つてみる。

が、白のまま。本屋から外に出たわけだから屋外だらう。本屋のどこかの部屋に入ったわけではあるまい。確かに、入ってきた自動ドアと同じところから出たはずだ。それに、こんな部屋が在るわけない。

そうだ。本屋の中に戻つてみよう。どうにかなるかもしれない。

そう思い、後ろを向いてみたが、

「……あれ？」

本屋が無くなっていた。

本来ならば自動ドアがあり、その向いの側で店内が覗き見れるはずの空間が、白一色に染まっている。

「…………」

呆然としつつ足元を見ると、これまた白。

アスファルトで舗装されているはずの道が、舗装されているのかされていないのか全くわからない白。

ただ、立つていられるし、タイルのように堅い感触がスニーカー越しに分かることから、地面はあるのだらう。

自分と自分が着ているものや持つているもの以外は全部、白。

遠近感も全くないように感じる。

「……………

現状を全く理解できない。

俺がいるのは本屋の前のはず。そして夜のはず。

一瞬だけ、「ホワイトアウト」という現象の名前が思い浮かんだが、すぐに否定する。ホワイトアウトは、極地や雪山でしか見られない現象だから。ここは本屋の前。大通り沿い。そりゃ、そのはず。

にも関わらず、話に聞いたことがあるホワイトアウトといふ現象と今の状況は似通っている。雪原と雲が一体化したように見え、天地の境目が分からなくなる現象に。

しかし、ここは日本の都市の中だ。雪原なんかない。どうこいつとだらう。

……なぜ俺は、こんなにも落ち着いていられるのだらう。怒りすぐると笑ってしまうように、ショックが大きすぎて冷静になれないのだらうか。

驚くほど自分を客観的に見れている。普段以上に。

持つたままの携帯のメールの返信画面の右上を見ると、

4 / 29 TUE 20:04

左上には、バッテリーの残量が。まだ満タンに近い。

そして、「圈外」の文字が。

.....。

もしかして、もしかすると、もしかしなくても、俺はどうしよう  
もない状況に立たされたのだろうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7545j/>

---

A LEGEND

2010年10月9日19時29分発行